道へき・複連

発行者
北海道へき地・複式教育研究連盟
http://dohekifuku.zenhekiren.net/index.html
委員長　温泉　敏
編集責任者　前田道弘
印刷所　山東印刷株式会社
夕張郡栗山町中央2丁目245　TEL 0123-72-1151
題字 書家 濱谷 彩鶴（はまや さいかく）氏

ファーストステージを終えて 感謝と次年度への期待と

～大会を通じて感じた「続ける」ことの大切さ～

北海道へき地・複式教育研究連盟委員長　温　泉　　敏

全道へき地複式教育研究大会胆振大会１ｓｔステージが９月１４日、１５日に洞爺湖町文化センターをメイン会場に開催しました。

開会式の中で、今回の大会には大きな意味が３つあると考えているとお話をいたしました。１つは昨年度第７０回記念大会で実施予定だった記念講演が１年越しで実施できたこと。講師は文部科学省初等中等教育局教育課程課の石田有記様でした。石田様は現行学習指導要領の編集者のお一人です。講演の内容は、本情報誌に掲載されておりますので、お読みいただきたく思います。

２つ目に大会開催方法です。今回からの新しいスタイルは組織検討委員会で各地区から上がってきた意見を形にした大会といえます。

３つ目は昨年度のオホーツク大会で取り組んだ分科会や授業のライブ配信、ワンモア配信を今回も継続して実施したこと。今回は参集とオンラインのハイブリット型で実施し、特に授業のライブ配信は２画面、４画面でした。

３年ぶりの参集での大会で、これまでとは異なる点もありました。多くの方のお力添えを得て、大会を無事終えたことに安堵しているというのが正直な気持ちでしょうか。

今回の大会も現地大会実行委員会の常に前向きな姿勢、会場校になった教職員の皆さんの授業への真摯な取組に心から感謝しています。

今、大会をふり返り、多くの成果とファイナルステージへの課題が明らかになったと思います。それらをここで１つ１つあげることはしませんが、半歩でも改善や挑戦をし、歩みを止めずにいきたいと思います。

また、この大会を通して「続ける」ことの大切さを感じました。もし、昨年度のオホーツク大会が実施できていなければ、今回の配信等はできなかったでしょうし、その前年の檜山大会がなければどうだったでしょうか。

同様のことは各地区でも同じなのではないかと思います。継続してきたからこそ、積み上げがあり、「私たちの学び」が止まることなく今日まできたのだと思います。そして、次の世代へとへき地・複式・小規模校の「よさ」とあわせて引き継がれていくのではないかと思うのです。

結びに、本大会に実行委員会からご参加いただき、ご指導・ご助言をいただきました胆振教育局をはじめ、多くの関係諸機関、大会に関わったたくさんの方に改めてお礼を申し上げ、稿を閉じたいと思います。

第71回全道へき地複式教育研究大会胆振大会を終えて

北海道教育庁胆振教育局
局　長　針ヶ谷　一義

第71回全道へき地複式教育研究大会胆振大会が、オンライン参加も含め、道内をはじめ全国各地から多くの先生方の御参加により、胆振管内で盛大に開催されましたことに、心からお祝いを申し上げます。

また、北海道へき地・複式教育研究連盟におかれましては、長年にわたり、小規模・複式の特性を生かした実践研究を組織的・継続的に積み重ねられ、本道はもとより全国のへき地・複式教育の振興と充実に御尽力いただいておりますことに、深く敬意を表します。

さて、今日、学校教育においては、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。

そのため、各学校においては、新たなＩＣＴ環境や先端技術を最大限活用することなどにより、学習の基盤となる資質・能力を確実に育成していくとともに、多様な児童生徒一人一人の興味・関心等に応じ、その意欲を高め、やりたいことを深められる学びを実現していくことが必要です。

このような中、本研究大会が、「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」を研究主題に、管内４会場で開催された公開授業では、「一人一人に応じた指導・支援の工夫を進めたことにより、他者と協働しながら学習に取り組み、自分の考えをさらに深める姿」や「ＩＣＴ端末を用いて、思考の過程が分かるように記録・整理し、共有したことにより、他者の意見を参考に自分の考えを整理する姿」が見られるなど、多くの成果を上げられました。

本研究大会で得られた成果を各地域や各学校におけるへき地・複式教育の一層の充実に向けた取組に積極的に活用されますとともに、全道各地域に広く発信していただきますことを御期待申し上げます。

結びに、北海道へき地・複式教育研究連盟並びに胆振へき地・複式教育連盟のますますの御発展と会員の皆様の更なる御健勝を祈念し、お祝いの言葉といたします。

第71回
全道へき地複式教育研究大会
胆振大会
実行委員長　前田　道弘
（白老町立竹浦小学校）

第71回目となる北海道へき地・複式教育研究連盟の大会を、９月１４・１５日の２日間、産業豊かで多様性に満ちた当地区において開催できましたことに、心より感謝とお礼を申し上げます。

引き続きコロナ禍の状況ではあるものの、第１０次長期５か年研究推進計画の４年次整理期にあたるということ、また、「GIGAスクール構想」の推進をはじめとした強い社会からの要請があることから、限られた条件の中でも、工夫をしながら大会を開催することを前提に、地区一丸となって計画を進めて参りました。

加盟校の減少、参加制限のある参集・ハイブリッド型開催の必要性、配信システムの構築、感染症対策、限られた予算や機材人材など、計画段階から課題は山積していると言えました。

しかしながら、『子どもたちに未来へ飛躍する力を』つけられることを念頭に、３年がかりで準備を進め、管内加盟校教職員の結束、教育関係機関のご協力はもとより、各市町のご理解、北海道教育大学やソフトバンク等のより一層のご支援の輪を広げさせていただくことで、ファーストステージの開催に漕ぎ着けることができました。

また、研究を積み重ねる中で、遠隔合同授業の取組やデジタル教科書の活用、配信技術の実践・検証、他地区・他県の実践に学ぶこと等、計り知れない財産を手に入れることができたと実感しています。

さらに、大会参加者や助言者の方々からご示唆やご助言をいただくことで、進めてきた研究の深まりと、今後の課題についても見えはじめ、また、１年越しで取り入れていただいた講演会からも、多くの学びをいただきました。

次年度ファイナルステージの開催に向け、ＩＣＴ活用が子どもたちの主体的・対話的で深い学びに直結することや、より効果的なハイブリッド型研究大会の在り方を探ること等、更なる研究の推進や運営方法の検討等が必要とされますが、今大会で得た知見を元に、積み重ねと深まりを目指して参りたいと存じます。

引き続きのご理解、ご協力をいただければ幸いです。

結びになりますが、本研究大会開催にあたりご尽力いただいた分科会会場校や協力校の教職員の皆様、ご支援、ご協力を賜りました北海道教育委員会、北海道教育庁胆振教育局、胆振管内各市町教育委員会、胆振管内教育長協議会、北海道教育大学、ソフトバンク、北海道小学校長会、北海道中学校長会、胆振教育研究所、全国へき地教育研究連盟等、管内外の関係機関の皆様に、紙面をお借りし、重ねて感謝とお礼を申し上げます。

講　演　会　概　要

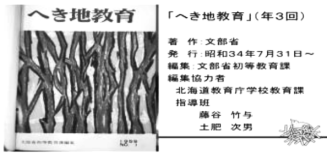
■演題

「新学習指導要領の確実な実施と
へき地複式教育に期待すること」
～未来の創り手となる子供たちの育成を目指して～

■講師

文部科学省
初等中等教育局教育課程課
教育課程企画室長
石　田　有　記　様

■《はじめに－研究主題に寄せて－》



○昭和34年旧文部省発刊の「へき地教育」
（編集協力；北海道教育庁学校教育課指導班）
初等中等教育局長

『へき地教育とその振興方策(抄)』より

「教育は、教育者と児童・生徒との精神作用であり、心のふれ合いに基づくのでなければ、真の効果を期待することはできない」「へき地の学校においては、教育の本質的な基盤、人格と人格とのふれ合いという教育活動の基盤を作るという意味において、きわめて好条件にある」

○へき地・複式・小規模校の特性を生かす

> キーワード　社会に開かれた教育課程　言語能力　ふるさと教育　主体的・対話的で深い学び　カリマネ　ICT　端末個別最適な学び、協働的な学び

分散会Ⅰ…ふるさと教育　Ⅱ…言語能力　Ⅲ…ＩＣＴ

■１　教育課程とは何か－学校の役割を考える－

教育基本法－学校教育法－学習指導要領

第１章総則　第２　イ「各教科及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること。」

総則解説　「学校で編成する教育課程については、(略)授業時数との関連において総合的に組織した教育計画である。」

■２「社会に開かれた教育課程」の実現と学習指導要領－豊かな人生を切り拓く、持続可能な社会の創り手の育成－

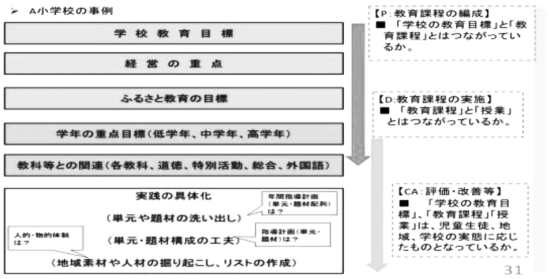
> 今向き合わなければならない社会と我が国の状況
> 産業構造の変化に伴う職業の変化
> 児童生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識

○学習指導要領改訂の背景

> 子供たちに、情報化やグローバル化など急激な社会変化の中でも、**未来の創り手となるために必要な資質・能力**を確実に備えることのできる学校教育を実現する。

・我が国の学校教育が育む「人間ならではの強み」
・学校教育のよさをさらに進化
小学校学習指導要領　前文　／　全体構造

■３　ふるさと教育とカリキュラム・マネジメント－経営実践に学ぶ－



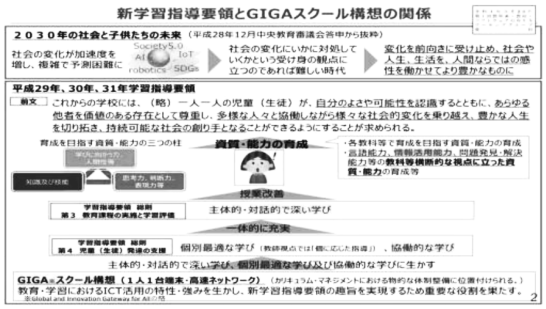
○地域の実態を踏まえた上で、教育課程を意義あるものにするために、「教育目標」「教育課程」「教育活動」をつなぐ

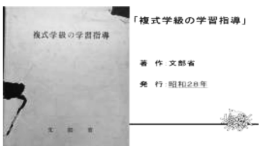
■４　言語能力の育成とカリキュラム・マネジメント－高校入試問題を参考に－

○最近の入学者選抜→実生活・実社会との関わり
○PISA2018結果から
「自分の考えを他者に伝わるように根拠を示して説明することに、引き続き課題がある」
・実生活・実社会で生きて働く力の育成
（教科等の指導の充実）
・教科等で学んだことを組み合わせて実生活・実社会に生かす（教育課程の充実）

■５　個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実－GIGAスクール構想－

○「真ん中に子供をおいて置きたい。」





「複式学級の学習指導」
昭和28年旧文部省発刊

○「間接指導の場は、自発的学習を育てるよりよい指導の場である（もしも適切な計画を立てて実施したならば）むしろ学習の本質的な場である。」
「単元内自由進度学習」

■６　へき地複式教育への期待－小規模学校の経営の確立－

○「教育実践（学校）」「学術研究（研究）」「行政施策（行政）」の往還…本大会で一堂に会している
○へき地複式教育の財産を耕す～少子化、小規模校化のパイオニアとして～

分　散　会

【分散会Ⅰ報告　学校･学級経営】
■研究主題（第１課題）
「自ら学び、心身ともに健康で、
感性豊かな子どもの育成」
～夢を求め 人に学び 里に生きる～
提言者　浜中町立浜中小学校
教諭　郡　山　美　帆

■提言概要

児童の実態を踏まえ、学校教育目標達成のため、校長が学校経営計画やグランドデザインに「プラス思考の学校づくり」と「あたたか・その気にさせる」の２つをキーワードとして示している。そのキーワードに基づき、全教職員・家庭・地域が連携・協働し、「チーム浜中」として、教育活動に取り組んでいる。

めざす子どもの姿の実現に向け、「浜中町へき地複式交流学習」と総合的な学習の時間「夢人里の時間」の充実に重点をおいて、教育活動を展開している。

「浜中町へき地複式交流」の取組は、小規模校児童の長所を伸ばしつつ可能な限り課題の解消を図ることを目的として取り組んでいる。コミュニケーション能力や主体的に学ぶ姿勢、思考力や表現力を高め、深い学びを実現している。

総合的な学習の時間を「めざす子どもの姿」と関連付け、「夢・人・里」の時間として、児童に身に付けさせたい力を明確にし、４年間を見通して取り組んでいる。地域の良さを見つけ、発信力を高め、自分にできることを考え、実践し、自分たちの生活につなげ、ふるさとの発展に関わろうとする心を育んでいる。

■研究協議

＜討議の柱＞

「へき地三特性を生かした地域に根ざした特色ある教育課程の創造と推進」

・探究活動は、総合的な学習の時間で行われることが多く、時間はかかるが、地域の人・物・事を結び付けるとともに、地域人材や関係団体外部を利用して、地域の良さを実感できる教育活動にすると効果がある。
・学年間や小中連携など、学びの連続性を保障し、資質・能力として確かな力を子どもに身に付けるため、学習活動としてのカリキュラム・マネジメントが必要である。
・交流学習に関わって、意図的に交流する機会をつくらなければならない。どのような形で、どのような目的で、何を大切にするのかを事前に打ち合わせを行い、はっきりとさせることが大切である。

■助言者より

「へき地性」、「小規模性」、「複式形態」のへき地教育の三特性を生かした教育活動を通して、「個に応じた指導の充実」や「地域資源を生かした体験活動の充実」、「問題解決能力の育成」に取り組むことが大切であり、へき地校だからこそできることがたくさんある。地域のつながりや教職員同士のつながり、子ども同士のつながりが強く、これらのつながりが、へき地・小規模校だからこそできることを広げている。その良さを生かし、さらに、三特性を効果的に教育活動の中に組み込んでいくかという視点で考えていただきたい。そして、教職員の共通理解と協働的な指導体制の構築など、へき地・小規模校の利点を整理し、生かしてもらいたい。

へき地・小規模の学校においては、その特性を生かしたうえで、地域の実態に応じたカリキュラム・マネジメントを進め、すべての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学び、持続可能な社会の創り手となることができるよう、資質・能力を育成する令和の日本型教育を実現していただきたい。

【分散会Ⅱ報告　学習指導①】
■研究主題（第６課題）
「新たな学びを創造する思考力・判断力・表現力の育成」
～各教科等の目標を実現するための
言語活動の充実を通して～
提言者　石狩市立浜益小学校
教諭　吉　弘　文　人

■提言概要

過疎地ならではの「地域の教育課題」と向き合いながら、未来をたくましく生きる力を育む教育活動を進めている。中学卒業後に一変する高校の学びにおいても、臆せずに自ら考え、意見を交わし、ともに学び合える力を身に付けさせるため、思考力・判断力・表現力を三位一体で育成することを目指し、主体的に学習に取り組む子どもの育成に向けた研究を進めている。

思考力・判断力・表現力を三位一体で育成する原点は「話し合いの中」にあり、その活性化が重要である。「話し合うことが楽しい」となるには話し合うスキルの習得が必要なことから、日常的に話し合い活動を実践している。また、その活性化のカギは教師の発問等にあると考え、話し合いを引き出すための発問等の工夫について研修している。また、自主公開研究会を毎年開催して本校の実践を示し、研究仮説の究明と研究の検証・改善に役立てている。

■研究協議

＜討議の柱＞

「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習指導過程の改善と充実」

・「話すこと」に焦点を当てたのは、子どもの取り組

みやすさからみてよい切り口。ボイスレコーダーの活用は発達段階が考慮された好例。
・「話し合い」を活性化させるためのヒントとして、ファシリテーション力に着目したところがよい。子どもの能力を引き出す機会が広がる。
・一単位時間に子どもが何を学習すべきかはっきりしていれば、子どもは意欲的に学習する。その見取りではＩＣＴが活躍。全体の可視化により、相互閲覧、相互評価につながる。
・「１５歳で独り立ち」する過疎地域の現状に目を向け、教育課題に挑戦する姿が素晴らしい。
・学習課題と日常とがうまく結びつけられるとよい。日常との関わりが明確だと、ふり返る意味が出る。

■助言者より

各教科のねらいを達成することや、個の特性に即した言語活動を充実させるため、子どもたちの経験や既習事項を踏まえた言語活動の充実に取り組んでいる。話す活動を積極的に取り入れることで、表現力の素地がつくられるとともに、「課題を見通す」という力が身に付く。発達段階を踏まえながらファシリテーション力を育成することにより、子どもたちが、「話し合うことが楽しい、議論することが楽しい」と思えるようになる。教科等で学んだことが子どもたちにとって生かされるためには、「学びたい・話したい・交流したい」という前向きな姿勢が大事である。

個別最適な学びについて、特に「学習の個性化」においては、資質・能力を土台として子どもの実態に応じ、子ども自身の学習が最適となるように調整することが肝要。浜益小の取組は、コミュニケーションを図るための資質・能力を育成し、実生活において生きて働く力が向上することが大いに期待できる。

協働的な学びについては、個別最適な学びが孤立した学びに陥ったり、集団の中で個が埋没したりしないように留意したい。一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出すことが可能となる。

【分散会Ⅲ報告　学習指導②】

■研究主題（第５課題）

「主体的に学び、互いに高め合う子どもの育成」
～ ICT 機器等を活用し、
交流することで学びを深める指導の工夫～

提言者　栗山町立継立小学校
校長　土　谷　直　樹

■提言概要

本校の実態を踏まえ、コミュニケーション力･人間力等の育成と教科指導の充実において、ICT機器等を活用することで、教育効果を高めることができると考えた。

コミュニケーション力･人間力等の育成では、姉妹都市の学校とのオンライン授業、土曜授業での地域人材を活用した施設見学や体験活動、ふるさとキャリア教育等を実施し、子ども達に貴重な体験の場を保障している。

教科指導の充実では、１人１台端末を活用した授業やデジタル教科書を使うことで指導過程・指導方法の工夫、デジタルドリルを活用した自主学習などで、学びの広がりが生まれている。

日常的な端末活用で、苦手だった子どもが積極的に発信したり、学習の記録化や学力定着度の確認が可能になったりと効果や活用が様々な場面で進んでいる。現在は、文字を書く機会の減少やタイピング時間の個人差、ノート指導との併用、情報モラルに関する指導の充実などを課題と捉え、研究を進めている。

■研究協議

＜討議の柱＞

「１人１台端末の効果的な活用など学習効果を高める指導方法の改善と充実」

・ジャムボードは子ども同士が交流するのに便利で、体育の授業でも活用している。ロイロノートは足跡が残るので、１人学年においても活用しやすい。
・他校とのオンライン学習については、修学旅行の計画・まとめ、姉妹都市との交流などで行っていて、職員同士の打合せでも使っている。
・１人学年の対話的・協働的な学びを保障するためにも、オンライン学習を活用している。
・コロナ対応のオンライン学習（ハイブリッド学習）については、特に複式学級での学習は担任１人で対応することが難しいし、オンラインでは子どものつまずきを正しく見取ることができない。
・オンライン学習は、子どもに自力学習の力が備わっていないと難しい。
・ICTスキル体系表については、十分でない学校がまだ多いと思うが、学校として整備して計画的に指導を進めていくことが重要である。

■助言者より

ICTの活用については、資質・能力の育成や教科指導を充実させることを目的にして、そのために必要な基礎的スキルを指導することが大切である。なお、情報モラル・情報セキュリティーについては、ICTを活用する場面のみの指導ではなく、日常生活の中で発達段階を踏まえて指導していく必要がある。

主体的な学びにつなげる授業づくりの視点として、「児童生徒が自ら選択する場面はあるか（個別最適な学び）」「児童生徒が主体的に活動しているか（学習者主体）」が、ポイントとなる。

教員自身が日常的にICTを活用するようになるためには、校内研修でICT活用の実践交流を行ったり、ICTスキル体系表を自分たちで作って活用したりしていくことが大切である。また、ICTを活用しながら校務の情報化を進めることにより、「業務の軽減と効率化」と「教育活動の質の改善」が期待できる。

各分科会報告

〈第１分科会 洞爺湖町立とうや小学校〉

１　研究主題

「単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求」

～少人数のメリットを生かした学習指導の改善と工夫～

２　研究内容

内容１　ICT機器の効果的な活用

内容２　少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫～リーダー学習の活用～

３　研究の成果

内容１に関わって

①「主体的な学び」について

ICT端末を活用することにより、鮮明な画像や動画提示による効果的な導入、調べ学習における検索、文字や図形を用いた自分の考えや意見の整理が容易になるとともに、その共有や意見交流などを通して様々な学びを展開することができた。また、児童は、端末の操作方法や多くの機能を活用する力を身に付けることで、自主的に学びを進めたり、新たな事柄にチャレンジしたりしようとする意欲的な姿も見られるようになってきた。

②「対話的な学び」について

これまでの研究や実践を通して、「対話的な学び」の充実に向けて次のICT機器や機能が有効であることが分かった。

・Castを活用した画面共有
・デジタルホワイトボード（Jamboard）
・ファイルの共有
・ビデオ会議（Google Meet）の活用

③「教師のICT活用技能向上」について

本校教職員による実技研修やICT機器の活用に向けた環境整備、ICT端末の活用を意識した提案授業などを通して教職員個々のICT機器の技能向上につながった。

内容２に関わって

①「リーダー学習」について

手探りながらも全学年でリーダー学習をスタートできたことや、発達段階におけるリーダー学習の在り方を明確にすることができた。その中で、まずは「リーダー学習に慣れる」ことを優先して、２単元以上リーダー学習を取り入れた指導計画を立案し実践することができたことが大きな成果である。

②「学習ルールの確立や基本的な学びの学習過程の確立」について

「よりよく学ぶために」「〇〇名人」は全学級統一した掲示の効果もあって児童の意識付けができた。これは、ICT機器の効果的な活用やリーダー学習など研究内容を深めていくときの土台やすべての学習活動の基礎となる取組なので、確実に身に付くように今後も粘り強く指導していきたい。

４　今後の課題

①第３学年からの円滑なICT端末の活用に向けた第１・２学年の指導計画の改善・充実
②第３学年からの円滑なICT端末の活用に向けた第１・２学年の育てたい資質・能力の明確化
③ICT端末以外のICT機器の効果的な活用（例えば、デジタル教科書を活用したリーダー学習の在り方）
④低学年のICT機器の活用（ICT端末や端末機能の活用も含めて）の在り方

〈第２分科会　伊達市立大滝徳舜瞥学校〉

１　研究主題

「未来を創る児童生徒の育成」
～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～

２　研究の成果

＊仮説１＊児童生徒一人一人の状況を把握し、人や物との対話を授業に取り入れることで、未来を創る児童生徒が育つのではないか。

＊仮説２＊目的をもって「ICTを効果的に活用し学びを蓄積する場」を継続して設定することで主体性・言語力・発信力が児童生徒に身に付くのではないか。

【成果】

本校の研究は、２年計画の１年次であり、これまで本校で取り組んだ３年間の研究成果を踏襲し、「人や物との対話」と「ICTの活用」を中心に授業を考え、本大会を迎えることになった。

２年生の授業では、道徳科の遠隔授業に取り組み、３・４年生の複式授業では、どちらの学年も単元の１時間目であった。

２年生では、「関内小学校との遠隔授業であったが、お互い少人数ながら、自分の考えを話すことができ、多様な考えに触れる機会や場になっていた。」「他校との違いを感じることによって、お互いの刺激になっていた。」「ジャムボードを使用したが、色々な使い方ができるので、今後、活用の仕方についての有効性が導けると考えられる。」

３・４年生では、「具体物を使っての操作が、単元の導入としてこれからの学習に結びつくと考えられる。」「スクールタクトを活用したが、それぞれ入力したものが比べられるという利点が見られた。」「間接指導の学びの仕方が身に付いている。」などの成果を確認することができた。

３　今後の課題

【課題】

２年生では、「画面越しということで、たくさんの声が聞こえず、１人ずつしか聞こえない。」「お互いの話し合いがもっとあればよいのではないか。」「ジャムボードのルールの徹底を行う。」

３・４年生では、「重さを比べる方法が、前時までの学習に結び付けられるとよかった。」「児童間の交流をもてるとよかった。」「端末操作で、文字や記号の入力の仕方が分からなかった時の対応。」などの内容を確認することができた。

【今後の取組】

今回は、「人や物との対話」と「ICT の活用」を中心に授業を行ったが、改善策として「学校内で話し合ったことを伝え合う。」「個人ではなく共同で作業すると対話が生まれ、色々な考えが出る。時間短縮にもつながる。」「個に応じた使い方として、実態を把握し、使えるものはフル活用してコミュニケーションをとる工夫をする。」「発達段階や実態に合わせたタブレットの打ち込み方法を考えたり、書く活動を加えたりして活用していく。」などが出された。

今後、改善策を参考にしながら、校内研修を通して、全職員と共通理解を図り、次年度に向け、更に研究を深めていきたい。

〈第３分科会　白老町立虎杖小学校〉

１　研究主題

「共に高め合う児童を目指して」
～児童の発達に応じた主体的・協働的な学びを通して～

２　研究内容

（１）主体的な学びを支える授業づくり
・ゴールを明確にした授業づくり
・同時間接指導の推進
・振り返りの視点の設定

（２）協働的な学習を通して、個の学びを「広げる・深める」授業づくり
・リーダー学習をベースとした授業づくり
・ICTを活用した授業づくり
・竹浦小学校との遠隔合同授業の実施

３　研究の成果

５・６年生は、４月から取り組んできた竹浦小学校との道徳科の合同遠隔授業を公開した。少人数学級のデメリットを補うために、意見発表の場面で両校をMeetで繋いで交流する活動を取り入れた。当日は、参観者に実際の教室の様子と、Meet画面を視聴できる別室を用意し、授業の内容が分かるようにした。

合同遠隔授業については、４月から取り組んできたため授業者も児童もMeetの操作等に習熟し、授業が開始当初よりスムーズに流れるようになった。事後の協議では、児童が機器の操作に慣れている様子を評価する声があった。またその一方、思考を深めるためには、意見の発表だけでなく深めるための話合いの場の設定が必要であるため、小グループでの話合いをMeetの中で実現するという視点も出された。

３・４年生は国語科で、それぞれの学年でリーダー学習を軸とした同時間接指導による複式授業を公開した。本校で取り組んでいる「つかむ」「考える・調べる・解く」「まとめる」「深める・広げる」の４段階の学習過程に、リーダーを中心として、児童が主体となって取り組んだ。

リーダー学習は、本校がそのために「学習ガイド」を作成してリーダーの習熟を図ったり、教師の支援の仕方について研修を重ねたりするなど、複式学級に限らず全校で取り組んでいる部分である。事後の協議では、子どもが主体的に学ぶリーダー学習の有効性や、ゴールの提示によって見通しをもたせることが主体的な学びに繋がるという意見が見られた。

４　今後の課題

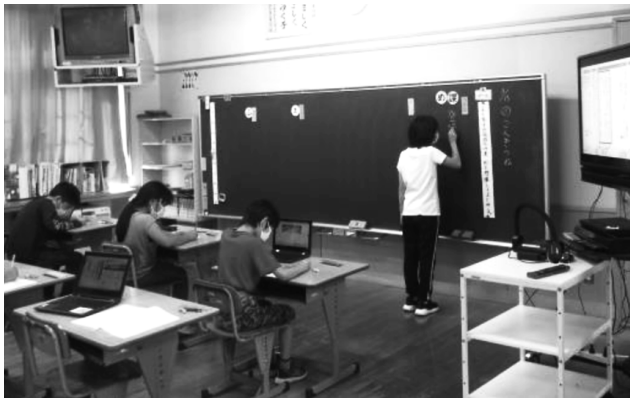
○遠隔合同学習の実施にあたって、それが教師の負担感に繋がらないよう、さらなるICT環境の整備や両校の打合せの効率化を進めていく必要がある。

○デジタル教科書やタブレットの活用をさらに進めていきながら、個々に応じた学びの実現に繋げる研究実践を重ねていく必要がある。

○次年度のファイナルステージに向けては、現在の取組の深化・充実を図る。特に少人数学級における「学びの深まり」の実現、子どもの主体的な学びの実現について研究実践を重ねていく。

５・６年道徳科合同遠隔授業

５・６年授業の配信画面（MeetとJamboard）



３・４年国語科複式授業

〈第４分科会　苫小牧市立樽前小学校〉

１　研究主題

「主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成」　～リーダー学習の取組を通して～

２　研究主題・研究の成果

＊仮説１＊

・児童に目的意識や学びの見通しをもたせることで、学習に主体的に取り組み、学びの成果を実感できるのではないか。

＊仮説２＊

・友だちとの関わり方や交流の仕方を工夫することで、児童はともに高まろうとするのではないか。

＊仮説３＊

・リーダー学習を取り入れることで、児童が学び合いを続けることができるのではないか。

＊成果＊

○３年計画の１年次ということで、少し不安はあった。参観した先生達から、「リーダー学習で児童がどのように成長していくか楽しみだ。」「持ち帰って取り入れてみたい。」という感想もあったので、研究の方向性や取組内容などについて自信をもつことができた。

○今年度の取組は、学びの見通しと学びの実感だった。見通しについては、身に付けさせたい数学的な見方・考え方をはっきりさせることで、効果的な手立てをとったり教材の準備をしたりすることができた。ＩＣＴも含め解決の方法を複数用意することで、児童は自分に合った方法を選択することができた。

○単元全体の見通しとして、「たしかめよう」の最後の問題にチャレンジさせている。レディネスとして活用することができるし、児童にとっては学びの実感にもつながるので今後も取り組んでいく。

○来年同じ学習をする後輩へアドバイスできることはないかという視点で、単元の振り返りを書いている。これを１年間続けていけば、本校の財産となるので、来年度活用していきたい。

○オンライン配信については、入念に準備をすることで、大きなトラブルもなくできた。オンラインの参加者から、もっとこんな映像が見たいということがあれば、可能な限り対応をしたい。

＊今後の取組＊

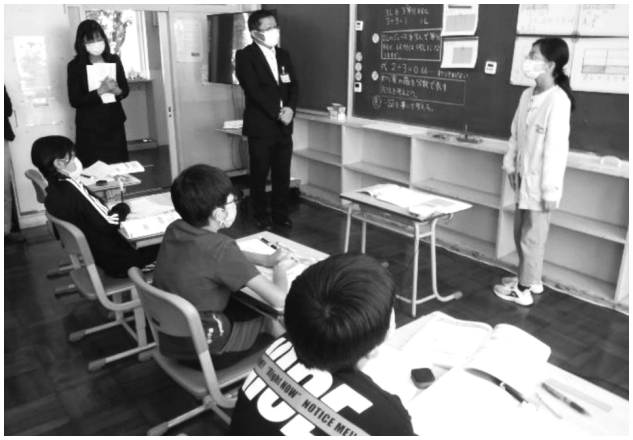
●タイムマネジメントの観点から、授業の時間配分について気をつけていきたい。例えば、ペア交流を活用すれば、必ずしも全員発表する必要はないと考える。また、小わたりをすることで、学習の進み具合なども確かめることができる。

　学習のまとめをしたり、練習問題を解いたりする時間を確保するようにしていく。

●教科書が取り扱っている内容をしっかりと吟味していく。例えば、教科書に載っている図１つとっても様々な配慮が盛り込まれているので、特に児童がつまずきやすいところなどでは丁寧に指導していく。

●計算力は、算数科を下支えする力として重要である。個別最適な学びの観点からも、児童の計算のレベルに合わせて作られた１分間計算プリントなどを活用していき、計算力の底上げを図っていく。

●次年度は、「話す・聞く・交流」がメインになる。特に、児童同士の発表につながりをもたせられるようにしていきたい。



大会写真　第71回全道へき地複式教育研究大会胆振大会より

全へき会長挨拶

講　演　会

配　信　本　部

分　散　会　Ⅰ

分　散　会　Ⅱ

分　散　会　Ⅲ

分科会授業会場①

分科会授業会場②

分科会研究協議

次期開催地から　第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会　ファイナルステージ

胆振の地で皆様とともに学ぶ機会を楽しみにお待ちしています

第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会実行委員長　**前　田　道　弘**

道へき第10次長期５か年研究推進計画の４年次に位置づけられた胆振大会ファーストステージが、全国へき地教育研究連盟をはじめ様々な方々のご支援のもと、盛会に終えることができましたことに、心より感謝申し上げます。

さて、胆振大会ファーストステージの成果と課題を引き継ぐ第72回全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファイナルステージは、ファーストステージと同様、全体会と分散会を洞爺湖町で、分科会を胆振管内４市町４会場において『産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から　子どもたちに未来へ飛躍する力を』を大会スローガンに開催いたします。

次年度大会では、胆振大会ファーストステージで行った、共同研究をさらに深める２年連続同一校公開授業やＩＣＴを活用した研究大会のあり方をさらに発展させ、示す必要があります。

あわせて複式教育の原点である「地域に根ざした、開かれた学校教育」を踏まえ、へき地で学ぶ子どもたちのために、成果と課題を実感できる実のある、第10次長計まとめの年にふさわしい大会となるよう努めてまいります。

北海道のへき地複式教育の充実と発展に向け、実行委員会一同、本年度に引き続き、産業豊かな胆振の地にて、皆様のお出でを心よりお待ちしております。

■胆振大会スローガン

『産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から　子どもたちに未来へ飛躍する力を』

■開催期日

令和５年
９月１３日（水）全体会・分散会
１４日（木）分科会

会場校	研究主題　～副主題～	分野等
洞爺湖町立 とうや小学校	単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探究　～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～	経営１ 学習６ 算数科
伊達市立 大滝徳舜瞥学校	未来を創る児童・生徒の育成　～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～	経営１ 学習５ 全教科
白老町立 虎杖小学校	共に高め合う児童を目指して ～児童の発達に応じた主体的・協働的な学びを通して～	経営１ 学習５６ 全教科
苫小牧市立 樽前小学校	主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成 ～リーダー学習の取組を通して～	経営１ 学習６ 算数科